

第5回検討会における主な意見の概要等

- この報告書は行政の考えに意見を返しているものではないので、我々が課題を見出して前向きに検討したということが伝わるような書き方がよいのではないか。また、各章の前文のところは議論の流れに沿って完結に書いた方がよい。(会長)
 - 第1章の内容は第1回、第2回で出てきた意見を踏まえて作成しているこの検討会のオリジナルのもの。報告書の主語は検討会であり、検討会の主体性が伝わるように修正する。(事務局(地方創生戦略監))
- 「チャンス」(資料1-1、p4、9行目)とは最初の段階では捉えていない。現状を踏まえ議論した結果の認識であるので、背景としての記述には合わない。
- 第5章の締め括りで、「住民やさまざまな主体がともに暮らしをつくり高め合うことで成り立つものであるのだから」という含みを持たせ、「町全体で考えましょう」という終わり方はなるほどと思った。
- 副題について、「超高齢化」を少しやわらかい言い方で「多世代共生」を表現できないか。
- p5、7行目は「構成される」よりも「構成して」の方が、主体性がでる。また、p4、19行目「期待したい」でなく「求められる」ではないか。そういう状況を踏まえ、我々が後章の議論をしたとすべきではないか。(会長)
- p4、19行目「期待したい」は希望になっている。1章は背景なので「求められる」が良い。また「チャンス」も前向きになりすぎているので、「検討しなければならない」がよい。(会長代理)
- p11、13行目「先に述べておく」は、まるで所与のように感じるので、検討会が自ら「目指すべきと考えた」とすべき。(会長)

- 敬和学園大学では近年、地域循環型教育に力を入れており、今回の生涯活躍のまち構想とも親和性がある。シニアの方の生涯学習にも貢献したいと思う。
また、CCRCの配置については、「まちなか」にあることで学生も参加しやすく、多世代共生のまちとして聖籠町らしいユニークなものとなるのではないか。
- CCRCの配置については学区単位が理想だが、現実的には1か所で聖籠病院の近くあるいは役場周辺にできるとよいのではないか。
- 活性化の一つとして、学生や若者が集う交流を敬和学園大学などと連携して取り組んでいくという趣旨の内容を報告書に盛り込んではどうか。(会長)
 - 「6ふれあい」の中で書いてはどうか。(会長代理)
- p11、9行目について、移住を第一の目的とするものではないとしているが、この町でも「支える側」「支えられる側」のバランスが崩れるのは不可避。いずれ、外からの移住者を促していくことはこの町でも必要となる。ここで検討したことが全てでなく、状況に応じて新しい施策を打ち出していくことでよりよいまちをつくれる。そのことを明確にするため、p11、9行目は敢えて残しておくべき。
また今後は、構想を具体的に地図に落とし込んでいくことが重要。
- p4、9行目にかけて「よりよい地域社会を構築するためのチャンス」とあるが、戦後の日本は「豊かさ」ばかりを追い求めてきた。しかし今、豊かさだけあって、本当に幸せなのかどうかが問われている。このまちには豊かでない部分はあっても、幸せな部分があるという趣旨を背景に書き込めば、ここで議論したCCRCや地域包括ケアシステムのかたちを優しい気持ちで捉えることができると思う。
- p17、2～4行目について、CCRCにお住まい方と自宅にお住まいの方と並べて記載しているが、両方の利用者のことを考えるのは地域包括ケアシステムでは当然のことなので、この部分を「CCRCができることによって

自宅にお住まいの方にも多様なニーズに応じたサービスが安定して提供できる可能性が出てくる」と修正した方がよい。

- 第1章の背景は事務局の思いが前のめりに出ているように感じる。検討会の立場として客観的な書き方にした方がよい。p26で「シニア世代の活動に関するアンケート調査」の結果が記載されているが、回答が多い順に紹介されているようでもないようだ。「町広報やホームページ等からの情報」がいきなり割り込んで登場してくる。意図があるならば、それを示しておくべき。
 - 高齢者の社会参画を促進するのに、町からの呼びかけがどの程度期待されているのかをまず先に紹介しておきたかったためである。

(事務局 (地方創生戦略監))

- 方向性としてはこれでよいと思うが、事業性との兼ね合いで、こうしたいけど出来ないとか、当初思ったものと少し違うものになったりする可能性もある。そうして出来上がるものこそが、本当の聖籠町版の生涯活躍のまちである。これからの実現化の道のりが大変である。
 - ご指摘のとおり、これから課題も出てくると思う。町としては住民の皆様方やさまざま主体と協働しながら、精一杯取り組んでいきたいと考えている

(事務局 (地方創生戦略監))

- 構想の背景 (p4) はやはり違和感がある。背景なので事実を書き、こういう事実があるから検討会でこう考えたという格好がよい。

- 今後の具現化が大変だと思うが、生涯活躍のまちをこの聖籠町から発信するくらいのつもりでやらないと、アピールできるものにはならない。ある意味、世の中で言われていることと視点を変えて聖籠町版を作っていないとモデルにはならない。

ただ、こういう問題について町民の危機感が未だないことも現状。

- 事業者の視点からみて確かに解決すべき課題も多いが、協力できる部分があれば考えていきたい。

- p22、31 行目に「地域子育て『グループ』」とあるが、サークル組織として活動しており、ニュアンスがやや違うので、「サークル」がよい。
- これから構築していく基礎になる部分はまとめられていると思う。
- p13、12～13 行目「多世代共生とそのため基盤、町民のライフステージの観点から施策を統合する視点で・・・」は分かりやすい表現に直すべき。その他、分かりやすい表現に努めた方がよいと感じた。また、図 4-1-2-1 の（事業主体）コーディネーターとはどのような人のことか。分かりやすくした方がよい。
 - （事業主体）コーディネーターは、C C R Cでの生活のお世話やサービスをコーディネートする人をイメージしている。そうした人と町の地域包括支援センターや今後新たに設置する生活支援コーディネーターとが連携することで、地域包括ケアシステムが補強されるというイメージ。
(事務局（地方創生戦略監）)
- 町の要介護認定率は 74 歳までは 3%程度、この世代の方はお元気なのだから、構想の背景で問うているように、高齢期を捉え直すこと、聖籠町がそうした社会を日本そしてこれから高齢化していくアジアへ発信していくことは価値あることである。

危機感の話があったが、高齢者 1 人の医療、介護、年金を現役世代 1 人で支えるような時代がきて、2100 年には日本の人口は半分になる。そうした危機感を p7 に記載してはどうか。

第 4 章の町が講ずべき施策の中で、高齢期を捉え直すための「いきがい」（高齢者が働き続けられる環境、役割を担うこと）は他の項目とは違ったレベルになるので、最後の 6 番目がよいのではないか。

多世代共生型 C C R Cにおける「コミュニティゾーン」だが、コミュニティはこのゾーンだけでなく全体なので、ここでは「ふれあい」あるいは「交流」ゾーンという名称でよいと思う。また、ケアの考え方の変遷は、親を子どもが世話するケアから、施設ケアを経て、最近ではコミュニティによるケア、助け合いが重要されてきている。コミュニティの重要性については安心

して子育てができることにもつながるし、それがまた老後の安心にもつながる。

生涯活躍のまち、地域包括ケアシステムをどのようにつくるかに今後の日本の在り様がかかっている。聖籠町は人口が 14,000 人程度で、地域包括ケアシステムが構築しやすい規模であり、今後の人口減少がゆるやか、さらに東港がありアジア・ロシアにもつながる経済圏があるといった利がある。この検討会で、概念はかなり出来上がっているので、ぜひ、実現化してほしい。

(会長代理)

- 地方創生の分野では「生涯活躍のまち」は多用される用語。多くは東京からの移住策という文脈が多いように思う。しかし、この検討会では、問題のより本質である超高齢化時代における地域社会を構築するために、高齢期をより前向きにとらえること、多世代共生、新しい関係づくりという点から議論がなされた。こういう角度からの検討は他にないように思う。私も大変勉強をさせていただいた。

報告書の修正であるが、副題については、もう少しやわらかい形にできないかを考えたい。また、第 1 章の構想の背景については、背景らしく客観的なものと主体的な問題意識とを区別して書き、さらに検討会の主体性がより明確になるよう修正を考えたい。ご意見のあった「豊かさ」の視点についても盛り込む方向で考えたい。これらの具体的な修正については会長と相談させていただく。(地方創生戦略監)

- 以降の最終的な修正については私(会長)に一任していただくことでよろしいか。(会長)
 - 異議なし(委員)

(文責：検討会事務局 事後修正する場合があります)